

がく この ち ちか りきこう じん ちか はじ し ゆう ちか
学を好むは知に近く、力行は仁に近く、恥を知るは勇に近し。この
さんしゃ し すなわ み おさ ゆえん し み おさ ゆえん し
三者を知らば、則ち身を修むる所以を知る。身を修むる所以を知
すなわ ひと おさ ゆえん し ひと おさ ゆえん し
れば、則ち人を治むる所以を知る。人を治むる所以を知らば、則
てんかこっか おさ ゆえん し
ち天下国家を治むる所以を知る。

【大体の意味内容】学を好み学ぶということは、知そのものではないが、知に近づくことである。力んで修業し続けることは、不器用な行であって仁そのものではないが、仁に近づくことである。己の未熟さや、犯してしまった罪を恥じることは、勇そのものではないが、勇に近づくことである。知・仁・勇の三つの徳を知ることは、自分自身の心身を整え修めるための根拠を知ることでもある。自分自身を修める根拠を知らば、人の生活を充実させ、治めるための根拠を知ることになる。人の生活を治める根拠を知らば、則ち、天下国家の泰平を維持し、治めるための根拠を知ることになるのだ。

「知・仁・勇」と言えば「文武両道でなおかつ寛容」な理想的人間像として語られることが多いと思いますが、「仁」では「おやっ」と思うほど、凡庸・平凡な人間像で語られています。最初の「学」にしても「知」そのものではない文脈ですから、切れ味鋭い知性のイメージで語られているわけではなさそうです。未知の世界を切り開いて新しい「知」を発見創造する話ではなく、先人の残した知的遺産を、それこそ地をはいっくばうようにして学び取ってゆへ、どちらかという鈍くさいイメージなのかもしれません。しかしそれが、「知」に近づくと道だといふことなのでしよう。苦勞をいとわず努力し続けて、素晴らしい仕事をされている人たちはよく、「運・鈍・根」を重視する話をされています。これを「鈍・根・運」と並べ替えれば、『中庸』文脈の「知・仁・勇」とちよび対応するように見えます。

巨大な岩石のような知の体系に、鈍刀を振るって地道に挑んでゆへ。けれどそれは、石を切の開じつとすのではなへ、石で「砥ぐ」様にして学び続けること、それが知入至る道なのである。

努力しても汗を流してもちっとも成果が上がらない。そうであっても己の力を尽くして、根負け

せず「頑張ること」。努力するにすぎず自分が生きがいですらあること。そんなメンタルの持ち主なら勝ち負けは「くだらわつた」ので、誰かと争って敵対するところの概念すらなくなってしまう。「いわば」「近い存在が欲しいか」。

でもでも弱くて愚かな者として、生きていく過程では大小さまざまな罪まで犯してきた。そんな我が身を省みて恥じる心が沸騰してへるなら、そわそわが「勇」＝湧、涌（「すなわち命の深い鉱脈から湧いてくるエネルギーである。自己変革、ひびくは世界変革をまひる起すエネルギーとなる。無自覚で潜在していらた自己の本当の生命運動、」運命」が発動する。

と、こんな声がこの「中庸」の文脈から聞こえてきました。